

神立春樹著『戦後村落景観の変貌』

高 重 進

(I)

本書は明治以降の農村を中心とする産業史に関して数々の論著を公刊してきた著者が、第二次大戦後の1960年以降の高度経済成長期後の人口減少・過疎現象が進行するわが国の村落景観の変貌に関する、近代史研究者としての分析視点と方法を提示したものである。著者はそのために全国的統計的分析から始め、その類型別検討、岡山県についての全県的、類型的検討、その一対象である吉備高原上の2つの農村についての分析、このような統計的分析の後、その一つの地域である小集落の農家の分析調査を行なうという、一連の体系的研究を行ない、1988年5月より1991年2月までの間に岡山大学経済学会雑誌上に発表した6編の論文をまとめて一書としたものが本書である。まとめるに際しての順序は、おおよそ発表の順序に従っており、その章の構成は次の5章からなっている。

序章 変貌過程にある村落景観——近代史研究の視点

第1章 戦後農業集落の変貌——村落景観論的考察の前提としての統計的粗描

第2章 戦後農業集落の変貌の諸相——農業集落類型的検討

第3章 岡山県にみる戦後農業集落の変貌——「農業集落調査」にもとづく統計的概観

第4章 村落景観変貌の素地——岡山県吉備高原農村の場合——

第5章 農業集落と村落景観——吉備高原上の一集落を事例として——

先ず、著者は村落景観の研究の系譜として歴史的研究の方法としての村落景観研究を木村礎氏の村落景観論にもとめ、木村氏の日本村落史は村落を基軸として、日本社会の本質を追求する方法であり、その日本村落史を全体性において把握する有効な視点として共同体論があり、その共同体論を展開するために景観論があると理解して、その限りでの論理的必然性は認めているが、しかし、それは過去を固有の研究対象とした歴史家においては村落景観の変貌は過去を把握する手掛り・歴史史料の喪失を意味するだけである。近代史研究者にとっての村落景観変貌は西欧諸国の資本主義化・近代化が農業革命が先行し、農業集落の解体・再編が雁行して行われるのに対して、わが国では、古い農業集落が明治以降もつづき、戦後においても、農民の農業生産や生活は農業集落でもって、そのまま存在してきた。だから、近代史研究者の「当面の」課題は、この農業集落の解体＝わが国の歴史的転換を見極めることであるとする。(p.10～p.11) 即ち、著者は、木村氏の景観論は方法であって変貌には保存を訴える以外に意味がないと考えるのに対して、近代化と農業集落の関連・農業集落の解体をわが国の歴史的転換であるにとらえ、変貌自体が目的であり、近代史研究の目的であると考えている。更に著者は、村落変貌の把握の方法として、勝原文夫氏の生活的風景論を展開している⁽¹⁾。その生活風景の中味は、文献史料・地図・現地調査の三位一体によって得られるものであるとする。また、この史料の部分は、農業集落調査表であると考え、

- (1) 全国的統計分析と類型的検討
- (2) 岡山の全県の統計分析と類型的検討
- (3) 2つの農村の統計的検討
- (4) 小集落の悉皆調査

の体系をもつものとして提示している。即ち、著者の体系とは、(1)の全国レベル、(2)の県レベル、(3)の町村レベル、(4)の集落レベルの4層と、統計と実地調査という二元の、いわば4層2元の体系をもつと考えてよいであろう。

第1章は戦後農業集落の変貌の基本的な統計として取上げる農業集落調査を取上げた理由を、村落＝ムラの変化・変貌を示す指標として、「農家が農業上相互に最も密接に共同しあっている農家集団」を基礎単位とし、農業生産や農家の生活上から村落共同体における総合関係を明らかにするための、1955年以降年次によって多少の差異はあるとしても、村落の構造の実態、生産の場、更には変化の態様までを把握するための視点がもり込まれていることをあげている。そのような統計によって、第1層の国レベルでは次の検討がなされる。①日本農業の構造変化が1950年以降1985年までの統計数字をもとに示されている。この中では、農家数の推移・兼業農家・経営耕地面積・機械化の様態が示される。②農業集落の推移では世帯数・人口数・農家・非農家の推移から1980年では農業集落に居住する非農家が全体の42.9%に達し、都市の居住者の44.1%にせまっている数字をあげてその異常さを指摘している。③都市化・共住化傾向の進展でも農家の置かれている環境の都市化の影響が、例えばD I Dとの距離との関係で取上げられ執拗に追求されている。④土地基盤の変化では、従来の農業環境の指標とされてきた、農地転用のデータと共に、工場のある農業集落数や農業用水の水源地別農業集落の数で、河川が1970年の57.5%から1980年には42%まで急激に低下した、などが取上げられている。⑤農業集落の機能変化では、集落の共同作業への出役状況の場合も農道の場合1970年では74.2%が集落管理であったものが1980年には71.2%に減少がみられるし、集落の運営については、従来は特定の階層（本家・地主・自作上層）に委ねられているのが一般的であったが1980年センサスの農業集落調査によれば、特定の人を選出する集落は25%、輪番制をとる集落は25%、選挙制をとる集落は50%となっていて、このことはさまざまな非農家群など、さまざまな異質主体を内部にもっていることが民主的運営方法をとっている理由であることを指摘して、このような運営方法の変化は、わが国の村落景観が、農業生産を軸とする村落共同体が保持してきたものが、変貌しつつあることを示すものであるとしている。

第2章では1980年世界農林業センサス農業集落別報告書にもとづく農業集落類型毎の検討が行われている。ここで用いられた類型とは当該農業集落の所在する市町村の総人口による一次区分の後、二次区分として、集落全域が市街化区域内にある都市的集落、所在する集落が旧市町村の林野率で80%未満の平地村、同80%以上の山地村、集落の総戸数に対する漁家数の割合が30%以上の漁村的集落の4つに区分し、平地村・山地村についてはそれを更に、集落の総耕地面積に対する水田の割合が70%以上の水田集落、同30～70%の田畑集落、同30%未満の畑地集落、及び集落の総戸数に対する林家数の割合が70%以上の山村的集落の4つに三次区分し、その組合せによる類型毎の検討がなされている。検討は全国一本の数値と1970年から80年にかけての変化としてとらえられている。その結果の個別については省略するが、農業生産そのものに関するものについては、労働力の流出、耕地の転用、混住化により、都市的集落が最も変化が著しく、これと対蹠的に平地村・山地村にわたる山村的集落において都市化の影響が最も小さいこと稲作規模拡大では平地水田集落に於てみられ、また変貌の多様なものは、畑地集落の北海道、南関東、南九州であることを指摘している。類型別にみた集落慣行・生活環境では、農道・農業用排水の普及状況はともに後退し、し尿・ごみ等についてはどの類型にもみられるという結論を導いている。以上この章における全国的数値は、いわば、各府県や個別の農業集落調査の数値を読みとるための下敷きをなす意義が最も大きいとはいえ、著者の体系の第一段階を示すものである。

第3章は岡山県における農業集落の変貌を、この後に行う個別地域の分析の一環として行った概観であり、全国レベルの分析を県レベルに下して行ったものである。また、この章における分析は全国との対比に於てなされ、岡山県の個性を示すものとして個別事例の分析の目的だけではなく、岡山県を知るための貴重な研究成果であるということができよう。特にその変化が1970年と80年との対比に於てなされていることは、今後の動向を占うための

成果としても有効な資料となろう。例えば果樹園芸県を自称する岡山県にあって、樹園地の増加が全国に比べてその率に於てはるかに及ばないこと、農業機械化先進県を自負する岡山県が更にのびていることは動態的統計の妙味を味わわせてくれるものである。ただ、この種の分析の中で、むづかしい解釈を求められるところが出てくることも事実である。例えば、農業集落の機能のうち、農道の管理について対全国比でみると、岡山県はなお集落管理が大きいという反面に於て、集落の代表者の選出に於ては輪番制が大きいことが特徴的となっているが、従来の集落運営が特定の階層に委ねられていたことが一般的であったことと対比して輪番制が高いことが多様化した結果とみることができるであろうか。ともあれ、岡山県の場合、農業集落についての類型別検討に於ても全国的検討と同様に、都市的集落の岡山市の周辺の岡山平野部に於て変貌が大きく、これと対蹠的に山地村山村的集落に於ては農業生産の担い手の流出による農業生産の衰微を来し、そのまとまりを継続しがたいものとしていると結論づけている。

第4章は町村レベルでの分析で、農業集落の在り方、変貌における対照的な類型の1つの山地村山村的集落が多い岡山県御津郡加茂川町と同上房郡賀陽町を取上げている。ここでは全国レベル及び県レベルで使用した「農業集落調査」と共に「農林業センサス」の主要作物の推移以下の数値に加えて「国勢調査」の世帯・人口数以下の数値を使用し、県南部の肥沃な平野部・干拓地農村地に対して対蹠的なものとして取上げている。このレベルでは村落景観の担い手である農家の状況及び村落景観を構成する、耕地景観と集落景観の変貌にかかわる、耕地の利用状況と農業集落の状況に検討の中心が置かれる。加茂川町と賀陽町が対照的な点は両町とも水稻＋タバコで90.4%と95.3%を1965年には占める町であったが、1985年までの間に、農家数では加茂川町は30.0%の減少があったのに対して賀陽町は19.9%にとどまることをはじめとして両町の間には戸口の減少、兼業化の進展、農業者の減少、経営耕地の減少、経営規模における下層への分解などの中、兼業化の進展を除い

てすべて加茂川町の変化がはげしく進行するのに対して、特に賀陽町の場合は経営規模の大きい層の増加がみられるなど、農業集落として加茂川町と対照的な進行を示すのは何故かという結論部分を後の個別集落に委ねて章を閉じている。

第5章の集落レベルでの分析では岡山県上房郡賀陽町上田中地区の悉皆調査を行った結果が明らかにされている。ここでは前章でのべたように農業生産条件を生かして営々として農業生産に励み、耕地景観・集落景観を保持してきた在り方から、前章の加茂川町から賀陽町を延長して考えられる村落景観の変化が少く保たれているのは何故かの問題にせまろうとした、著者にとっての最終のゴールに当るものである。また、4層2元の中の2元の中での唯一のものであることは云うまでもない。上田中地区の集落は現在戸数32戸中20戸が農家で、農家数は1970年の25戸に比べて5戸減となっている。検討は極めて詳細にわたっており、それについては述べることをひかえるが、特に規模拡大の農家側の条件と具体的な方法をアンケート形式の悉皆調査によって明らかにすると共に、農家の意志決定が、どのように近い将来に於ても行われるであろうかということに関して調査検討がなされている。特に、購入条件とヤミ小作を含めての権利設定に関する、相手方を含めての詳細なデータは通常では得られるものではなく、学術研究上の研究事例としてまた、農政上の資料として、現在ばかりでなく、後々までも貴重なものとなるろう。

著者はこのすべての結論として、「現在日本農業の課題となっている農地の有効利用、特定農家へ土地を集積し大規模経営の成立を図るということの見通しはなく、積極的な展望をもつことはむづかしい。また、農家の農業経営は次第に困難となり、農業後継者の見通しのもてない農家が少なくないなど、世代交替の時期に変化が予想されるとはいえ、完全な離農はそれほど進まず、ましてや挙家離村は起こらないであろう。(中略) 農業に大きな変化は予想できず、(中略) 農業集落に大きな変化が予想できない以上、村落景観に

もこの地区では大きな変化が予想されないといえる。」(p. 210) とのべている。著者はこの結論を導く根拠として中核経営農家にしても経営規模は3haが限度であること、規模拡大を予想するものとしての所有と経営の相関関係に於て両者の乖離が、1975年には小であったものが1989年には大きくなり、大規模経営農家が出現してはいるものの、それは営農努力としての貸借によるもので、農家の意志は小作料を勘案して、現状維持が8割を占め、むしろ将来に生産組合による相互扶助を、世代交替を予想して望んでいること、等から導き出し説得力あるものとしている。

(Ⅱ)

著者はどのように戦後村落景観の変貌に対してせまろうとしているであろうか。表題のように村落の変化を村落の景観に求めようとしていることがある。当初に於て著者がその契機を回顧して、「村々とそこの人々の生産・生活を観察しようと思った」と本書のまへがきで述べているように、村とそこに居住し、生活する人々を観察すること、つまり景観に表われた形においてつかむということにあった。また、その方法論を木村礎氏の村落景観論を敷衍し、正したところに求めている。木村氏が村落景観研究に際して用いた中心的方法は、景観復原論であり、それは氏の編著である『村落景観の史的研究』の序章展望において景観復原に至った経緯の中で、1960年代になって社会構成史的学風のすぐれた担い手の一人であった永原慶二氏が歴史考古学的方法というきわめて具体的な方法を以てする「中世村落の復原」を提唱したことの意味をはっきりと指摘している⁽²⁾。それは、村落景観復原の要点としてあげた連続と変化の両相を見極めることの中で、木村氏の研究が歴史時代の古代・中世・近世の村落研究であることから、復原第一の目標が設定されたのに対して、著者の戦後のそれは1950年代後半からの日本経済の高度成長期以降の村落景観の変貌は、村落景観史上において最も激しいものの一つで

あることから、必然的に変化に重点をおいたアプローチとなったわけである。木村氏の村落景観論を今少しみてみよう。木村氏はその著『日本村落史』においての「むすび」を「日本共同体論と現代」のサブタイトルとし、その「1. 近代における共同体の素描」の項目で次のようにのべている。「共同体の問題が歴史の基底部に不可欠のものとしてすわっているのは、近代以前の社会においてであろう。(中略) 新しい時代をその前代との関係においてみるという歴史的観点に立つ限り、日本近代における共同体の問題は、依然として重要である。しかし、当然予想されることは、それが近代における共同体の問題であるために、前近代に比して一層考察すべき要素が複雑多様であろうということである。残念ながら、現在の私には予想される複雑多様性を不十分なながらも統一した上での明確な日本近代共同体論を展開できない。これは手に余る仕事である⁽³⁾。」と必要性を述べながらも言及を、近世「村落共同体」の近代における推転についてごく大まかなアウトラインを引くにとどめるとしている。それは木村氏が「勤労農民の生活を他ならぬ均等の生活の場たる村落において復原し、それを基軸として歴史を見る、それが日本村落だ」とし、「そのために景観研究が必要だと私が強調しているのは、そこに勤労農民の生活の場がまがうことなく、そのものとして存在し、その考察は最小限、経営単位・共同体・権力（領主制）の3つを含むべきものと私には考えられる」としてあげ、その中の経営単位や共同体の問題は村落史固有の研究分野である」と考えていたわけで、そのことは著者も「日本村落史を全体性において把握するための、きめて有効な視点であり方法であるのは共同体論である」ことを引用し、認めているところである。(p. 7) それにもかかわらず「現代の村落研究は共同体論をストレートに研究することが可能であり、極めて重要であることはいうまでもないが、共同体論を基軸にした村落研究における景観研究の意義は、村落研究におけるそれよりも意義はるかに小さいといわざるをえないであろう」と述べて木村氏をはじめとする歴史家の戦後村落景観の変貌は史料消滅が大きくグローブアップされるに

とどまることになるとし、近代史研究者にとっては先にも紹介したように歴史的転換を見極めることが課題であるとするのである。(p. 11)

この問題を考えるために、同じように共同体と景観論を問題とした岩本由輝氏の論稿を取上げてみることにしたい。氏は木村氏の景観論に対して次のように述べている。「ここには村落とは何かということに対する木村の考えが強く打出されており、それはまた共同体というものに対する木村の理解のしかたにもかかわってくるものである。私にとって村落とは共同体として問題とされなければならないものである。その場合、当然のことながら行政区画や統治機構としての藩政村や五人組あるいは景観論的な集落をもって共同体、とりわけ農業社会における共同体としての村落共同体と考えるわけにはいかないのである。その意味で共同体としての村落研究にとって景観の解明は、調査対象を選択する場合の前提にすぎないのであって、本質ではないということになるのである。もちろん、村落景観の研究が現在のままでよいというのではないが景観をもって村落の本質とみることはできないということを経験したのである。私が解明したいのは、こうした表面に現われている景観のごとき現象の背景にあって、それを変化せしめる原動力を常に創出して行くところの生産・生活のための共同組織としての村落共同体である⁽⁴⁾」とある。そこには三者三様の景観の理解のし方にまず根本的な違いがあるように思われることを指摘したい。

(Ⅲ)

歴史学や社会諸科学の中であって共同体の意味について論議を呼んだ如く、景観という述語が地理学にあって論議を呼んだ歴史は永い。そして現在再び地理学の周辺諸科学の間で論議をかもし出そうとしている。

景観という用語を使用する場合に地理学関係では避けて通ることのできないことがある。それは原語がドイツ語では Landschaft であり、その英語の

該当する用語が Landscape とあるにもかかわらず、ドイツ語の Landschaft の「幾通りにもとることができる概念」であるということの指摘のみで適切な対応策が考えられてこなかったことである。地理学の用法を他の諸科学の分野にあてはめて考えることは適当ではないが、一言述べておくことにしたい。

先づ詳細な論議は省いて次の2つの事例をもって景観を考えてみることにしたい⁽⁵⁾。一つは O.Schlüter がはじめて提案した景観のアメリカ版の粗述者ともいふべき、O.Sauer の論文“Morphology of Landscape”に関する結論部分についての Hartshorne の指摘である。この「論文はこの概念（評者注 Krebs の考えた景観）について詳しく叙述したものだと思われされるかも知れない。けれども、この論文を研究すればするほど“Landschaft という言葉は個々の特定の地域についてはあまり用いられないで、むしろ多くの類似した地域に類型的と見なされるような一定の様相を備えた性格について用いられる」従って、例示として、山岳地域としてのアルプスの特定の性格は、世界の他の部分においても繰返されるもので、アルプスの景観とよばれてよいものであり、これに対してアルプスという Land、すなわち、アルプス地域は、そこ限りの独自のものである。」といった“Landscape”と“Area”とがどう異なるかを知ることが、ますます難しくなってくる。ところによってこれらの言葉はどちらに置きかえてもよいように用いられているし、また、所によっては、なんかそこに相違のあることを示唆されているようでもある。（中略）それよりもっと後の論文で述べられているところによれば、景観という「図柄には(1)自然地域の形象と、(2)自然景観（physical landscape）の上に人間の活動によって重ねあわされた形態即ち文化景観とが含まれる」とある。この叙述やその他の叙述からわれわれは“自然地域”（natural area）と“自然景観”（physical landscape）とは同義語であると結論するのべている。

上述は景観を地理学の学術用語としてみれば、もともと単に目に見えるものばかりでなく、それとともにもう一面の地域の意味をもっていることを示

すわけで、その意味で岩本氏の木村批判は一面のみをとった批判とみることができるし、地域という意味を内包する点で、共同体とは表裏の関係にあると理解することができよう。従って、それが古代とか中世とかの古い時代をあつかった場合は必然的な応用動作であるわけで、永原慶二氏の中世村落の復原や中世村落の景観の取上げ方も理解できよう。

そこで著者に期待したいことは歴史的転換を見極める課題と共に、村落共同体論の問題についての著者の見解である。

(Ⅳ)

本書が4層2元の村落景観研究の方法と体系を樹立した点に極めて大きな意義とユニークなところがあることについては先に紹介のところで既に述べたところであるが、この体系が農業集落調査を2元の1つとして体系の骨組みとした点でも大きな意義を持つことをつけ加えなければならない。

ここで用いられてきた統計資料の農業集落調査は、これまで通常の農業分析に用いられた世界農業センサスのものとはその方法に於て項目においても、更にその目的に於ても異っている。その考え方は、「当時の学界・行政における農業・農村構造を「共同体」あるいは「部落」の観点から再認識しようとする傾向を反映して、この視点を基礎にした農業構造の統計的把握を農業センサスで「行おう」というにあり、「従来、統計調査の技術的観点から設定されていた“調査区”の性格を変更して“部落”と一致させる必要がある。そして農家調査結果は部落別に集計し、他方、“部落”そのものを観察単位とした統計調査を行い、両者相まって本当に使える統計にする⁽⁶⁾」にあった。農業集落調査はいうまでもなく、通常の世界農業センサスが昭和25年2月1日を以て第1回とし、以降5年毎に実施されてきたのに対して、昭和30年の臨時農業基本調査、いわゆる臨農を以て嚆矢とするもので、その趣旨はわが国の経済の高度成長に伴い農村部の人口流出により農業集落の村

落共同体的機能が著しく変質し、放置すれば農業・農村の崩壊をもたらす恐れすらあるという状況の中で単なる経済的側面でなく農業集落の再評価の必要性に迫られたからである。従って、その単位と分類に於て近代の村的規模や呼称が基準となったものである。例えば、先に紹介のところで述べた村落類型についていえば、岡山藩士大澤惟貞の寛政年間（1789～1801）の編になる備前国の地誌『吉備温故秘録』の村落分類である、平場・山上・谷間・山寄・町並にそれぞれ必要に応じて、大川端・堤ぎはがつけ加えられる方式と軌を一にしているといえる⁽⁷⁾。実質村落機能の調査であったために、学術的利用価値は高いにもかかわらず、ストレートに行政区域と一致しなかったこともあって、その利用が皆無ともいうべき状況にあったわけで、その点本著の主題である村落景観研究にとっては最適の資料であるといわねばならない。ただ、行政資料として使用されることの少い資料は、それ故に行政上の区分との関係に於て必ずしもはっきりとした注意が払われなかった事も考えられるところで、例えば、区画整理や基盤整備について、本著の著者が最長の注意を払って、「同一集落が二度行うことがないと仮定すれば」（p. 42）と断って使用しなければならないことも起ってくるわけで、その他にも、1970年に比べて1980年の農業用水を河川に求める農業集落の数の後退という解釈がどこまでの事実を含むかについての疑問も残されるところである。

（p. 43）また農業集落調査の結果を利用するに際して、集落区画が余りにも多いために該当農業集落がどの類型に属するか見出すことが容易でない。この点は著者の分析結果を有効に活用するためにも結果表のどこかに一覧表の形で入れていただければありがたい。

（V）

筆者は先に共同体論の必要性について述べるところがあったが、それには本著のハイライトである第5章の上田中地区の将来に関心があったからであ

る。そこで最後に感想を述べさせてもらうこととしたい。この中で最も注目すべき事実は、紹介のところで述べたように、上層農の成長、そしてその停滞と農事組合のあり方の問題であろう。①番農家、②番農家をはじめとする上層農と農事組合との関係は、これを近世の村になぞらえて考えると、名主とその連合に当る宮座に象徴されるような村共同体に相当するとみてよいであろう。近代的共同体は経済的な維持発展を含むことが前提となりはするが、封建的な村共同体であれ、近代的な共同体であれ、その基本的性格は構成員の維持について補完的役割を果たすことが必要条件となることに変わりはない。そして、例えば、②番農家のように120aの自作農で18aの借入と50aの購入によって現下での規模拡大の目的は達しながらも農業経営の今後について現状維持よりほかはない、先々のことはわからない、作業委託の時期がくると思われる、ということになってきているわけであり、①番農家も50aの所有地に借入地177a計227aの経営耕地をもつに至ったがいまや現状維持である。今後農業経営は先の見通しが暗い、できなくなれば生産組合に助けてほしいという希望が出てきている。予想される世代交代の時の橋渡し・補完にどのような役割をこの生産組合が果せるかが問題で、性格が大きな意味をもつであろう。著者の経験では例えば香川県大川郡のマンモス農協大川農協ではカンツリーエレベータが1つの機能的な役割を果たす一種共同体的あり方を示した⁽⁸⁾、北海道中富良野町では強力な農協がやはり町の農家をまとめた共同体を形成させる役割を果たしていることを知ることができた。その意味で上層農と生産組合とのあり方が将来を左右することになろう。

最後に、専門を異にするものではあったが同じ村落研究に関心をもつものとして書評をお引受けしたが、力不足から適切な書評が行えず、誤解や読み違いがあったのではないかと恐れるものである。著者のご寛恕をお願い申し上げます。

1991年10月刊 御茶の水書房 219頁 3605円

注

- (1) 勝原文夫『村の美学——日本風景論序説——』1979年 論創社
同上『農の美学——原風景と修景の座標——』1986年 論創社
- (2) 木村礎『村落共同体の史的研究』1988年 八木書店 p. 19
- (3) 木村礎『日本村落史』1978年 弘文堂 p. 296～297
- (4) 岩本由輝『柳田国男の共同体論』1978年 御茶の水書房 p. 248
- (5) Hartshorne R. (1939): The Nature of Geography Annals of the Association of
American Geographers vol XX IX No.3 & 4 V. Landschaft and Landscape
pp149～pp174
ハーツホーン 地理学方法論——地理学の性格—— 野村正七訳 1957年 朝倉書店
第V章 景観——“Landschaft”と“Landscape” p. 157～p. 189
以下の引用は上掲書による。
- (6) 渡辺岳力編著『農業集落論』1978年 龍溪書舎 所収 第二章
室谷武彦「農業集落調査」p. 54
- (7) 大澤惟貞著「吉備温故秘録」元之巻 吉備群書集成 第七輯所収 1931年 吉備群書
集成刊行会
- (8) 拙稿：兼業農家地域における新しい村落共同体——香川県長尾町の場合——
『西南日本における都市化の進展と農山漁村の変貌』(1) 所収 1969年 文部省科研報
告書 (石田寛編著)